

リレー随筆

黒井健さんに聞く「物語との出会い」

『ハナミズキのみち』金の星社 © KEN OFFICE, 2013

日本を代表する絵本画家の一人、黒井健先生の絵は風景でも動物でも、ひとつひとつの絵の色や線の温かみに「詩情」という言葉が浮かびます。教科書にも載っている「『いんぎつね』」の絵は、淡い色使いが物語に奥行きを与えてくれます。先生は絵本、童話のイラスト

タッチは年代を問わず多くの人を魅了し続けています。今回、画業40年を記念した「黒井健 絵本原画の世界展」を高知県では初めて開かれる黒井健さん本人に創作活動の軌跡と本展の見どころを伺いました。

——どんな思いで、絵本を描き続けましたか。

【黒井さん】優れた児童文学に絵を添える仕事を、無上の喜びと感じてきました。一人では気づかなかつたことや、自分とは違う物の見方、感じ方を教えてくれる作品と出会い、育ててもらっていると思います。

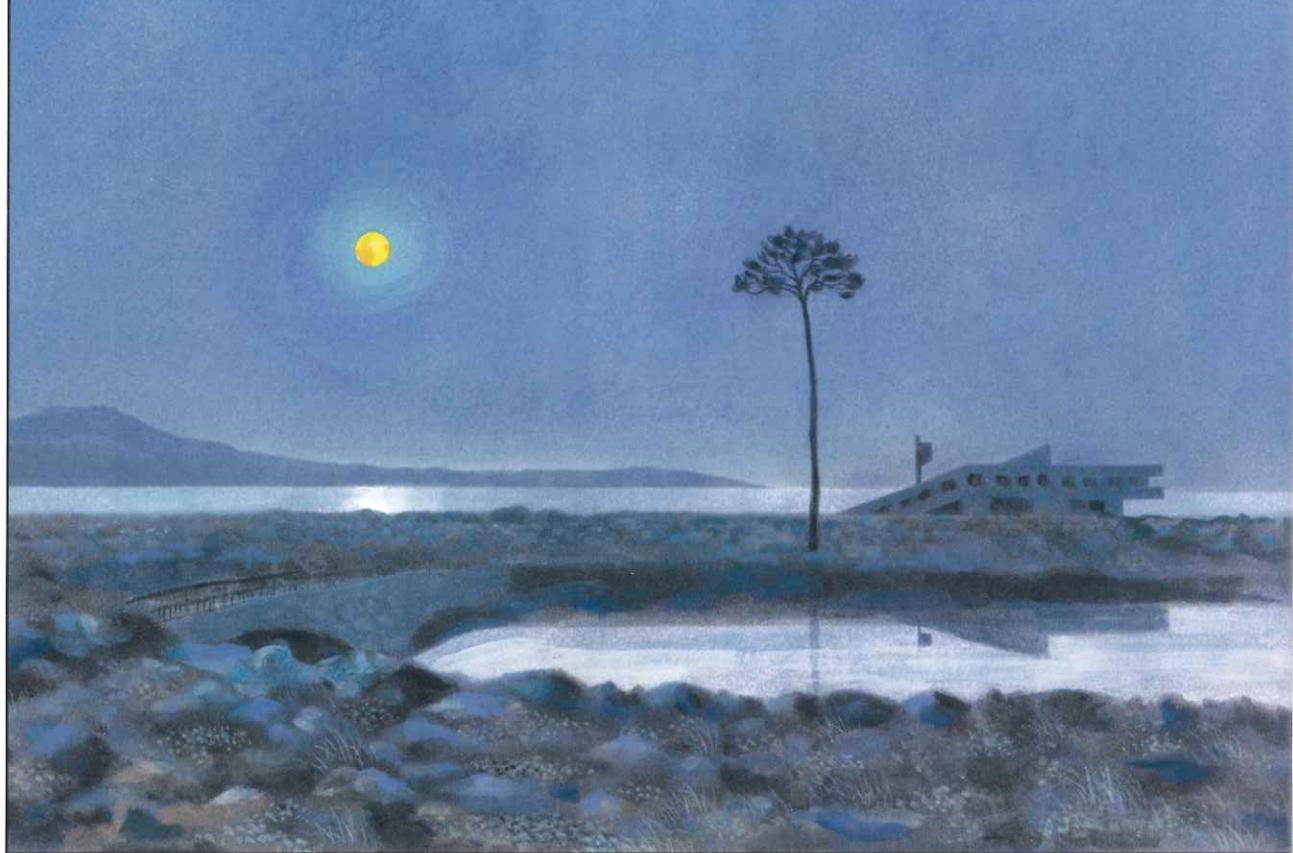
——新美南吉の名作「『いんぎつね』」の絵本作りが、転機だったそうですね。

【黒井さん】明るくかわいいキャラクターの絵本を描き続けていたある日、本屋に行ったら、自分の本が置かれていなくてショックを受けました。これからどう描いていいか分からなくなつたとき、「『いんぎつね』」の仕事をいただきました。南吉の古里、愛知県半田市を訪ね、田園風景などを見て感じたままを描いたら、すぐに再版となつた。それからは、自信を持つて創作に取り組むことができました。

——ソフトで温かみのある絵は、どのように生み出しているのですか？

【黒井さん】作品を読んで、心に響いたもの、共感するものを形にする。これからも、文と絵の調和を大切にしていきたいと思います。

黒井先生の紡ぐ物語の世界を見に、高知県立文学館へお越し下さい。



展覧会紹介
Exhibition

黒井健 絵本原画の世界展 「物語との出会い」

平成26年
2月15日(土)

▼
4月13日(日)
企画展示室

概観料500円

「絵本」の情景

素晴らしい絵本との出会いーそれは、幼い子どもの心に夢と潤いを与えます。そして、子どもの頃に出会った心に残る絵本は、人生の大好きな宝物の一つとなるでしょう。

子どもたちは、絵本の中で色々な経験をすることができます。絵本を読んで、登場人物の気持ちになり、登場人物と共に喜んだり、涙ぐんだりしながら、豊かな心を育んでいきます。とりわけ絵は、絵でなければ味わうことの出来ない人間の感性に訴えるものがあります。文章に絵が添えられているからこそ、物語への関心を高め、想像力やことばの力をより豊かに引き出すことも可能なのです。

▲黒井健さん(撮影/丸毛透)

黒井健さんの淡く繊細な絵の数々は、独特のタッチと色合いで、多くの魅了を感じました。優しい光と影の濃淡が重なり合い、まるで水に煙る景色のようです。黒井さんは新潟県のご出身で、冬は色の少ない雪国の淡い色彩の風景の中で幼少期を過ごし、その中で育まれた色彩感覚は「自分の絵の原体験になつてゐる。(児童文化37号/2005)と語られています。絵本

また、大人になってから、心に残る大切な絵本を手に取つてみると、子どもの時には気付かなかつた魅力を発見することができます。絵本は子どものためのものだけでなく、生涯の友だちとして私たちに素晴らしい贈り物を届けてくれるのであります。

今回の展覧会では、絵本画家として知られる黒井健さんの名作絵本の原画を約100点展示し、物語に寄り添い、描かれた絵本原画をご覧頂きたいと考えています。

・色鉛筆の魔術師

・児童文学との出会い

1973年、黒井さんはイラストレーターとして独立します。人気イラストレーターとして多くの絵本を手がける中で、新美南吉の「ごんぎつね」と出会います。

「ごんぎつね」は昭和30年代から小学校の国語の教科書に取り上げられ、多くの人が学校で習つたことのある作品です。この物語は1931(昭和6)年、雑誌「赤い鳥」に投稿され、翌年1月に掲載されました。いたずら子狐の

洗油で溶かし、布で少しづつすり込んでいく独特的の技法を確立させた作品が『虹のかかる村』(木暮正夫著/サンリオ/1981)です。

「こういう絵を描くために絵描きになつたのかもしれないと思つたんです」(家庭ファーラム16号/2007)と語るこの作品は黒井さんのエポックとなりました。この頃から風景画の中に叙情を描き出す作品を生み出すようになつていきました。今では、絶版となつてゐる『虹のかかる村』ですが、今回の展覧会では、貴重な絶版本の展示もございますので、ぜひご覧いただければと思います。

ごんと人間・兵十の心のすれ違いを描いた悲哀の物語として知られています。新美南吉がこの物語を書いたのは18歳の時です。その3年前、15歳の時にはすでに「ストーリイには悲哀がなくてはならない。悲哀は愛にかわる。けれどその愛は、芸術に関係あるかどうか。よし関係はなくともよい、俺は、悲哀、即ち愛を含めるストーリイをかこう。」という言葉が日記に見られます。この物語もその根底には「愛」というテーマが貫かれていると言えます。



会
見
展
覽
紹
介
Exhibition

黒井健 絵本原画の世界展 物語との出会い 画業40年記念

平成26年
2月15日(土)

▼
4月13日(日)
企画展示室

観覧料500円

■展示解説

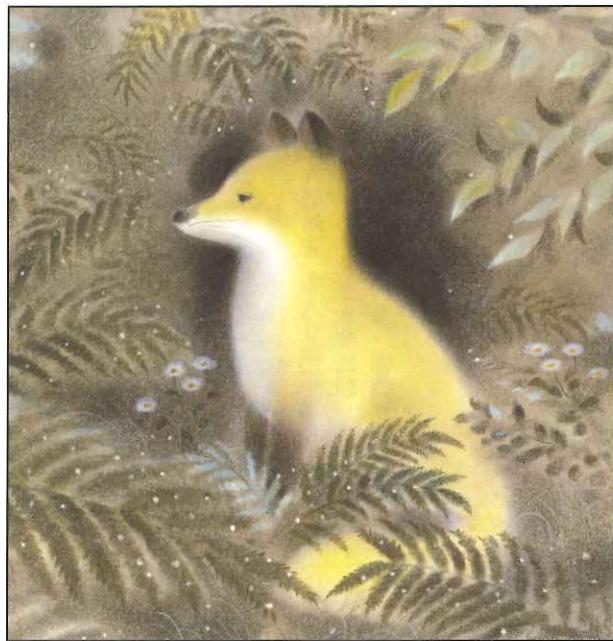
展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約30分程度)

*2月15日(土)は講演会のため、お休みします。

参加費: 要当日観覧券
申込: 不要。

直接会場にお越しください。



『ごんぎつね』偕成社 © KEN OFFICE, 1986

(学芸課／谷岡真衣)

黒井さんの絵には、言葉を送りだした物語の作者との“心の交歓”を感じます。原画ならではの心を映し出すような繊細な線や淡い色彩の素晴らしさがあります。愛情豊かな「原画の力」を、ぜひ、文学館でご体感ください。

またこの物語は、新美南吉の故郷が舞台になっていると思われる箇所があります。黒井さんも『ごんぎつね』の絵を描くために南吉の故郷、愛知県半田市を訪れています。その際、『ごんぎつね』の絵本に携わった経験を通して『絵本』というものは、構成したり何かしたりして作るものじゃなく「生まれる」もので、理論性だと頭で考えることではないのではないか『第11回絵本学会基調講演／2008』と考えるようになり、その後の物語に絵を描い

ていく上での大きな方向性をつかんだとのことです。

物語に絵を添えることを「挿絵を描くことで新美南吉という人と交信し、わからない部分があるからこそ、こうして旅をくり返していくのではないか』(MOE5月号／1998)、「投稿詩やメールヘンに絵を添えることはその作品を書いた人たちとの会話に他なりません」(詩とメールヘン3月号／2003)と述べています。感性の呼応を通して、黒井さんは今日に至るまで素晴らしい絵本を書き続けています。

けています。

黒井さんの絵には、言葉を送りだした物語の作者との“心の交歓”を感じます。原画ならではの心を映し出すような繊細な線や淡い色彩の素晴らしさがあります。愛情豊かな「原画の力」を、ぜひ、文学館でご体感ください。

◆関連企画のご案内◆

■黒井健さん 講演会

- ・日 時: 2月15日(土) 午後1時30分～2時50分(予定)
- ・場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- ・参加費: **要当日観覧券**
- ・定 員: 100名(事前申込・電話又は文学館受付)
- ・内 容: 黒井健さんと当館館長・元吉喜志男による対談形式での講演会です。

■黒井健さん サイン会【2回開催/各回とも約1時間30分程度】

- ・日 時: ①2月15日(土) 午後3時～ ②2月16日(日) 午前10時～
※2月15日(土)は講演会終了後、休憩をはさんで開催いたします。
- ・場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- ・参加費: 参加には、**観覧券と整理券**が必要です。(※2月15日の講演会に参加された方は、同じ観覧券でご参加いただけます。)
- ・定 員: 各回とも先着100名
- ・内 容: **当館ミュージアムショップで関連書籍を購入された方に整理券を配付します。**
※サインはお一人様1回限り、1冊まで。

■工作イベント「おはなしモビールを作ろう」

- ・日 時: 3月21日(金・祝) 午後1時～4時(予定)
- ・場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- ・内 容: おはなしに登場するモチーフをもとにフェルト&ビーズで可愛いゆらゆらモビールを作ろう!
※ハサミを使用します。小さなお子様は保護者同伴でお願いします。
- ・定 員: 先着40名(電話又は文学館受付にてお申し込みください。)
- ・参加費: 参加には、**当日観覧券と材料費300円**が必要です。



■おはなしキャラバン

- ・日 時: 3月1日(土) 午後2時～
 - ・場 所: 文学館1階こどものぶんがく室
 - ・内 容: 黒井健さんの絵本の読み聞かせです。
 - ・参加費: **無料** 当日、直接会場にお越しください。
- 他にも朗読の会(3月15日(土)開催)など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。また、絵本や画集をはじめオリジナル雑貨も販売いたします。

トピックス

◆有川浩先生より、資料をご寄贈いただきました！

全国の有川浩ファンの皆さん、お待たせしました！今年、有川先生より文学館へ資料をご寄贈いただきましたので、ご報告申し上げます。

「寄贈いただいた資料は、次の通りです。

- ・第2回～4回ブログ大賞盾
- ・第2回箕面・世界子どもアカデミー賞
- ・Y.A作品賞関係資料
- ・（生徒による感想文集及び手書き賞状）
- ・白泉社 感謝状及びメダル
- ・F2A搭乗者名入り額縁
- ・有川浩氏搭乗F2B写真額
- ・防衛省 航空幕僚長 感謝状及び盾



▲第2～4回ブログ大賞盾(手前)と白泉社感謝状及びメダル



▲防衛省 航空幕僚長 盾

有川先生が受賞された賞の盾や感謝状、写真など、貴重な資料の数々であり、有川先生の足跡もうかがうことができます。こうして見てみると、本当に幅広い世代の方に有川先生が支持されていることがわかります。

近いうちに展示を入替し、皆さんにも早く見ていただけるようにいたしますので、楽しみにお待ち下さい！

（学芸課／永橋禎子）

トピックス

◆全国文学館協議会総務情報部会が開催されました！

2013年11月1日(金)～2日(土)全国文学館協議会の第6回総務情報部会が、26館38名の参加により高知県立文学館で開催されました。

当館の元吉喜志男館長による開会の挨拶

の後、4館からの事例報告がありました。

世田谷文学館学芸部長生田美秋氏が「文学館の運営、組織、人事—その現状と課題」について、神奈川近代文学館副館長遷茂樹氏が「事務局体制の状況 神奈川近代文学館の事例」について、姫路文学館係長玉田克宏氏が「姫路文学館における来館者増加の分析」について、最後に元吉館長が「高知県立文学館の管理、運営の概要」について報告し、熱心な討議がなされました。

そして、全国文学館協議会会長、中村稔氏による閉会の挨拶の後、当館の開館後初めての開催となった古典の展覧会「紀貫之と『土佐日記』」展や、全国文学館共同展示「文学と天災地変」、収蔵庫などをご覧いただきました。

施設見学終了後、山内家ゆかりの三翠園ホテルでの懇親会へ移動。山崎一穎幹事長の乾杯の後、土佐の皿鉢料理などを堪能いただきました。会場では、名刺や情報交換がなされ、皆様交流を深められていきました。参加者からのスピーチや土佐民話の紙芝居

などもご覧いただき、最後に次回の開催地、山形県の遅筆堂文庫館長遠藤敦子氏から挨拶を頂戴しました。ユーモアを交えたお話をぶりに拍手喝采。参加者は再会を約束し盛り上がりの中閉会しました。

翌日は、当館カルチャーサポーターの丸田宏子さんも同乗していただき、高速道路を走り本山町の大原富枝文学館へ行きました。副町長の今西源一氏、教育長の澤田和久氏や文学館職員の皆様の出迎えで『婉という女』を中心とした常設展と当館からの巡回展『市原麟一郎展』を見学しました。その後、地元の農家の人々が出品しているさくら市を見学しました。高知では馴染みの深い「チャーテ」と呼ばれる野菜を買っている方が数人いましたが、料理は上手くできましたでしょうか。

実は、吉井勇記念館、上林暁記念館へもご案内いたしましたのですが、何しろ高知県内東西の海岸線は300km。とても半日では移動できませんでした。本当に残念でした。

最後になりましたが、今回、高知へお越しくださいました皆様、ありがとうございました。また、残念ながらお越しいただけなかった館の皆様、是非、一度、高知へお越しください。「まちゅうきね。」

（学芸課長／津田加須子）

岸本の漂流者野村長平——土佐のロビンソン・クルーソー—— 猪野 瞳

野村長平の漂流記念碑と古い墓を、岡本弥太の墓の近くでみたのは、ずい分と前だった。まだ赤岡から岸本に至る海沿いの長い砂山一帯に続いていた墓地群のなかだった。宇多の松原鶴が舞うと「土佐日記」にてくるあたりで、戦後も浜ではまだ地曳網が残っていた。

この野村長平については井伏鱒二が1935年に「無人島長平」と「長平の墓」を短いものにかいだ。そのあとジョン万次郎漂流記をかいて37年直木賞を受賞するが、安芸方面の木賃宿にヒントを得た名品「へんろう宿」もかいた。田中貢太郎の「博浪沙」に加わり、よく土佐へきたなかでの、いざれも土佐ものだった。

今ではこの赤岡から岸本に至る海沿い墓地は改葬事業で、すっかり取り払われ、バイパスと高架

▲右から、長平像、昭和初めに建つた小さな古墓、長平記念碑。海に向かつて建つている。



墓の近くでみたのは、ずい分と前だった。まだ赤

岡から岸本に至る海沿いの長い砂山一帯に続いていた墓地群のなかだった。宇多の松原鶴が舞うと

「土佐日記」にてくるあたりで、戦後も浜ではまだ地曳網が残っていた。

この野村長平については井伏鱒二が1935年に

に「無人島長平」と「長平の墓」を短いものにかい

だ。そのあとジョン万次郎漂流記をかいて37年

直木賞を受賞するが、安芸方面の木賃宿にヒント

を得た名品「へんろう宿」もかいた。田中貢太郎

の「博浪沙」に加わり、よく土佐へきたなかでの、

いざれも土佐ものだった。

今ではこの赤岡から岸本に至る海沿い墓地は改

葬事業で、すっかり取り払われ、バイパスと高架

鐵道が伸び、改葬跡地は住宅地と広い空き地に

変わった。墓地は新しい墓地団地に移転した。

岡本弥太の墓は徳王寺へ、野村長平の墓は海辺

に移った。そこに今、昭和初めに建つた長平記念

碑と小さな古墓と、漂流200年を記念する大

きな最近の長平像と解説板が、太平洋に語りか

けるように海向けて建つ。

野村長平は岸本の船乗りだった。手結港の雇

われ船長として、蔵米を積んで田野、奈半利など

の東海岸をめぐる藩政時代の運送業者というと

ころだつたろう。天明5年正月というから17

85年、手結港をでたと強風と潮に冲合へ吹

き流され14日間漂流、八丈島近くの無人島へ流

れ着いた。島に自生するシャシャブ、グイミ、

アホーデリなど喰い命をつなぐが、仲間も死に

1人孤島に残される。

そこへ漂流船が流れつき、共同でなんとか船

をつくり脱出、八丈島へ流れつく。13年の孤島暮しだつた。江戸へつれていかれ調べられ、故郷岸本に帰りついたのは寛政10年正月というから1798年、13年の漂流帰国だった。ちょうど13回法会が行われていたところへ戻つたため亡靈が帰ってきたと騒がれたといふ。

この野村長平は中浜万次郎がアメリカ捕鯨船に救助され、アメリカへ渡り、当時の文明を身につけて帰国、幕末の重要な人物となつていつた漂流譚と違つてほとんど忘れられてきた。万次郎より53年早く孤島に13年間閉じこめられ生き抜いた苦難の漂流者だった。日本のロビンソン・クルーソーと評する声もあつたが、大きな記念像の下の高さ一尺ばかりの古い昔の墓が、なによりも長平を静かに語りついている。(詩人)

『天彦』

吉井勇著 甲鳥書林刊

昭和14年10月 360頁 四六判布装函入

井上植恵氏寄贈 井上孝夫文庫資料

——最近の寄贈資料から——

吉井勇著 甲鳥書林刊

昭和14年10月 360頁 四六判布装函入

イベント紹介



▲県審査に選ばれたみなさん

高知県立文学館では、「第16回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査」を平成25年11月10日(金)13時より、文学館1階ホールにて行いました。今回は、県内の小・中学校から108名が朗読者として参加し、3会場の地区審査(8月16日西部会場・8月20日東部会場、8月23日高知会場)にて選出された16校22名が、県審査に出場しました。今年は、特に中学生の参加者が増え、多彩な表現の朗読を聞くことができました。県審査に向け、児童生徒たちの積み重ねた努力がうかがえる朗読で、全ての参加者が地区審査の時よりも上達していると評されました。観覧者数は、地区審査と県審査をあわせて、延べ521名でした。今年は、特に中学生の参加者が

特別審査員には絵本『へんなかお』で全国的に有名な

絵本作家・大森裕子先生をお迎えし、特別賞審査と絵本をつくることについての記念講演会、サイン会も実施いたしました。記念講演会の中で、子ども時代から描き続けた絵の紹介や、「著書を朗読して下さいました。また、子育ての中で絵本を作るきっかけとなつたエピソードを交え、絵本をつくるということ、子育てをするといふことも、自分を見つめることになつている」と語っておられました。

今後も、朗読を通して多くの人に文学に興味を持っていたけるよう、ますますコンクールを発展させていきますので」期待下さい。

(学芸課／谷岡真衣)



11月10日に朗読コンクールを開催しました！

審査結果は以下のとあります。(敬称略)

金賞	高知学芸中学校 2年	松岡 葵
特別賞	大森裕子賞 土佐中学校 3年	橋本 なつき
特別賞	教育長賞 黒潮町立大方中学校 3年	門脇 沙絵
郷土文学賞	高知市立高須小学校 4年	田中 友介
銀賞	高知大学教育学部附属小学校 3年 高知大学教育学部附属中学校 2年	林 芽唯 雲形 瑠伊
銅賞	土佐市立蓮池小学校 5年 土佐市立宇佐小学校 6年 高知市立潮江東小学校 6年 土佐中学校 3年 高知大学教育学部附属中学校 3年	長家 美岬 泉 智華 柴岡 花音 村山 真理子 橋口 真里

その他、11名の方が入賞されました。

「団塊の秋」に思う

元吉 喜志男

人生のライフサイクルは、季節の四季になぞらえ「玄冬・青春・朱夏・白秋」と表現されることがあります。

このほど、堺屋太一氏の『団塊の秋』という著書が出版されました。堺屋氏といえば、通商産業省時代に「大阪万博」を企画・実施。沖縄開発庁に出向し「沖縄海洋博」も担当。工業技術院で自然エネルギーに関するサンシャイン計画に携わった後、通産省を退官。

民間人となつてからも、経済企画庁長官への招聘、博覧会のプロデューサー、マスマディア関連、学者等々、時代の大きな潮流を読む洞察力とグローバルな識見をバックに、人生の季節ごとに多才な存在感とスケールでの足跡を残してきました。

作家としての業績もめざましく、通産省在職中に近未来的な社会を描いた小説『油断!』でデビュー。翌年の『団塊の世代』はミリオンセラーとなり、「団塊の世代」の語を世に送り出し、多方面に多大な影響を与えました。また、大河ドラマの原作となつた『峠の群像』、『秀吉』をはじめとする歴史小説。『知能革命』、『工業社会が終わる・知能社会が始まる』等の社会評論や、首都機能移転に関する『新都建設』これしかない日本の未来』をはじめとした公共政策分野における政策提言に関する著作も多数執筆され、氏の状況分析や歴史観は、考え方や発想のヒントとして随分お世話になつてきました。60代に入ってからも『団塊の世代「黄金の十年」が始まる』の著書での言葉に刺激されたものでした。

今回の『団塊の秋』は、同じ時代を生きた様々な職業の人達がそれぞれの人生の季節での歩みを回想しながら、2015—2028年までの生き様を描く近未来ソミュレーション小説ですが、同じ時代を旅した者として「あー、もう秋なのだ」という思いとともに「実りの秋とは…? 人生の幸せとは…?」を考えさせてくれる一冊でもありました。

好
評
開
催
中
！

近代文学のあけぼの展

自由民権運動と文学

明治初期に活躍した
高知県人をご紹介！



▲展示室風景

企画展「近代文学のあけぼの展」(1月31日まで)は、坂崎紫瀬・宮崎夢柳・植木枝盛の三人に焦点をあてたもので、文学館でもはじめての試みになります。

自由民権思想を人々にわかりやすく伝えるために、政治小説や翻訳小説、新体詩などを書いた三人の作品は、今ではほとんど忘れられていますが、当時としては本当に新しい試みであり、人々からも人気を博していました。彼らの活躍を見ていると、人々の先陣を切ってチャレンジする高知人スピリットをありありと感じ取ることができます。

自由民権運動、近代文学というと、非常に難しそうなイメージがありますが、高知市出身のマンガ家・J.E.Tさんの素敵なイラストを使い、若い方にもわかりやすくお伝えできるように工夫をしています。おかげさまで、学生さんなどにもご来館いただいております。

展示では、高知県内に残されている貴重な明治10年代～20年代の書籍や、三人の直筆資料などをご紹介しています。特に高知市民図書館や青山文庫などに所蔵されている近代文学の書籍の数々は、今ではなかなか手に入らないものばかりで、こうした貴重な資料が一堂に会する機会は少ないため、ぜひ一度ご覧いただければと思います。

関連企画では、国文学研究資料館副館長の谷川恵一先生による記念講演会「植木枝盛の



▲「世しや武士」を踊る文学散歩の皆さん(於:演長)



(学芸課／永橋禎子)

近代文学
の
あけぼの展

平成25年 12月7日(土)～平成26年 1月31日(金)

会場：高知県立文学館 企画展示室 年末年始を除き、会期中無休

観覧料：400円（常設展含む）開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

◆関連企画のご案内◆

■朗読の会「夜明けをつけた文学」

- 開催日：1月18日(土) 午後2時～4時
- 場所：文学館1階ホール
- 参加費：無料
- 内容：上田秋成「夢恋の鯉魚」、宮崎夢柳「自由の凱歌」などを文学館カルチャーサポーターが朗読します。

■文学散歩「近代文学のあけぼのをめぐる」～市街民権コース～

- 開催日：1月20日(月) 午前9時30分～午後2時30分（予定・現地解散）
 - 内容：高知市内にある紫瀬、夢柳、枝盛ゆかりの地をめぐったあと、料亭・演長で芸妓さんの歌う「民権かぞえ歌」「民権都々逸」を聞きながら、少しリッチなお昼ご飯をいただきます。
 - 参加費：4,200円（昼食・保険・観覧券等諸経費含む）
 - 申込：電話または文学館受付にて1月17日(金)までにお申し込みください。
- ※他にも毎週土曜日の午後1時30分より展示解説があります。

企画展 案内

近代文学のあけぼの展

高知県出身の自由民権の志士たち、坂崎紫瀬、宮崎夢柳、植木枝盛らは、外国文学の翻訳や口語詩の試みを行い、日本の近代文学に大きな影響を及ぼしました。

三人を中心に、近代文学のあけぼのと高知の人々との関わりをご紹介します。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は7ページをご覧ください。



平成26年
1月31日(金)まで
場所：企画展示室
観覧料：400円(常設展含)



© JET

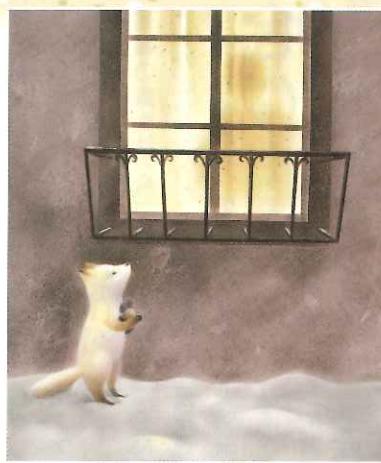
※館内メンテナンスのため、平成26年2月1日(土)～2月12日(水)
は臨時休館とさせていただきます。

画業40年記念 黒井健 絵本原画の世界展 ～物語との出会い～

平成26年 2月15日(土)～4月13日(日)まで 会期中無休
場所：企画展示室 観覧料：500円(常設展含)

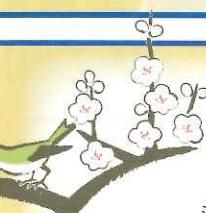
2012年に画業40年を迎えたイラストレーターの黒井健さんは、新美南吉の代表作である『ごんぎつね』や『手ぶくろを買いに』をはじめ200冊以上の絵本や画集を出版し、その独特の繊細なタッチは多くの人を魅了してきました。

言葉に寄り添い紡ぎ出される黒井健さんの原画の世界をご紹介します。



『手ぶくろを買いに』偕成社 © KEN OFFICE, 1988

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



ただいま
準備中！

当館報で連載し、好評をいただいている 「土佐文学さんぽ」が本になります！

平成10(1998)年7月11日の「藤並の森」第1号から現在まで、高知の文学者と、ゆかりの深い場所を多角的な視点で執筆し、好評をいただいているエッセイ「土佐文学さんぽ」。これまで、岡林清水氏(国文学者)、国則三雄志氏(雑文家)、猪野睦氏(詩人)が執筆してくださいました。

この春、これまでの「土佐文学さんぽ」を再編し、一冊の本にいたします。
高知の新しい文学ガイドブックとしてご活用ください。(※詳細は次号にて)

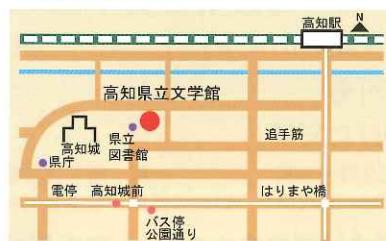


利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 一般350円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)
「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857